特集　「海」に寄せて

吉井秀夫

私たちが暮らす日本は、その四周を海に囲まれている。しかし、実際に暮らす場所により、「海」の印象は人それぞれであろう。四国で生まれ育った両親をもち、旧播磨国で育った私にとって、「海」といえば瀬戸内海である。私の生活した土地の海辺には父も働く工場が建ち並び、直接海をみることはできなかったが、正月とお盆には、両親の生家を訪れるために連絡船で海を行き来した。混雑する船のデッキで讃岐うどんをすすりながら、海の向こうにみえる屋島を眺めつつ源平合戦に思いを巡らした経験は、私が歴史に関心をもつ契機の一つであった。

大学に進学して朝鮮考古学を志してからは、船に乗って対馬海峡を何度も往復した。夕方五時に下関を出発する関釜フェリーは、瀬戸内海では経験したことがない大きな波にゆられつつ進む。先史・古代にこの海を自由に行き来しただろう人々のことを考えつつ、船酔いしないようにじっと横になっていると、夜中過ぎに船は釜山沖に到着する。しかし船はそのまま停泊し、翌朝の入国審査が始まる時間にようやく港に着岸する。旅券を持って入国審査を待つ列に並ぶことで、現在を生きる者は、決して自由に海を行き来することができないことを実感することになった。

二〇一六年四月一六日に「海」を共通テーマとして開催された二〇一六年の史学研究会例会で、私自身はこうした個人的な経験を振り返りつつ、多くの参加者と共に五人の方々による報告を興味深く拝聴させていただいた。本号は、当日の報告者および紙上参加をお願いした方から寄せられた計六編の論説からなる。本稿を書くに当たって改めて各論説を読ませていただく中で、地域や時代が異なっても、海をめぐる人々の営みには、互いに通ずるところがあることを知らされた。

海岸近くに位置する古墳の分析を手がかりとして古墳時代社会と海との関わりを明らかにしようとした魚津論説、近世

における丹後伊根浦での捕鯨の実態を追求した東論説、そして一八世紀フランスの沿岸貿易船に乗り込んだ船長の出身地や家系を分析した君塚論説は、海は人々にさまざまな生活の糧を提供し、外の世界へと開かれていたが、時には人々の生活を規定し、あるいは「足かせ」ともなりえたことを物語る。一方、西アフリカへのフランス植民地拡大におけるマルセイユ商人の役割を検討した杉本論説、清末の西江に出没した「海賊」と、この地域での貿易に関わったイギリスとの関係を論じた村上論説、第二次台湾海峡危機におけるアメリカ合衆国の台湾政策を検討した吹戸論説は、一九世紀以降の海をめぐる問題が、世界規模のさまざまな地域間関係とは無関係ではなくなったことを示している。

現在の私は、瀬戸内海を橋で渡り、飛行機に乗って海外へと向かう。そうした旅路において、海は車窓の一風景となってしまった。しかし、日本と周辺諸国・地域との問題をはじめとして、海をめぐる諸問題はさらに複雑さを増している。こうした問題に対して、歴史学はどのように関わっていくことができるのかについても考えつつ、本号の諸論説を通して、歴史と海をめぐる航海を楽しんでいただければ幸いである。

（本会常務理事）